

1 研究主題 「伝え合い・学び合いを通して育む、確かな学びと豊かな心」 ～心と体を弾ませ、主体的に取り組める環境づくり～

2 主題設定の理由

心揺り動かされる環境があることで、子どもは自発的に関わろうとする。子どもが自ら環境に関わることで不思議さや面白さ、美しさ等を感じ体験して「もっと知りたい」「もっとやってみたい」という思いが芽生える。その思いが主体的に活動できる力へと育っていく。子ども自ら興味関心をもって環境に関わりながら多様な経験を重ねていけるようにするために、幼児期の発達の特性と一人ひとりの子どもの実態を踏まえ、保育の環境を計画的に構成することが重要となる。

また、教師には環境に教育価値と意図を込め、子どもの主体性と教師の意図をバランスよく絡ませた保育をしていくことが求められる。少人数保育の中での課題を乗り越える体験をどう支えていったらよいか、幼保小の円滑な接続期のプログラムという点も考慮しながら今年度も引き続き、子どもの思いや主体性を大切にしてい保育の探究・展開を大事にし、研究を深めていきたい。

3 研究の内容

- 子どもの思いや主体性を大切にしたい保育を探究・展開する。
- 子ども達で作り出した遊びが充実・継続し、発展していける環境づくりに取り組む。
- 幼保小中 12 年間の子どもの育ちの連続性を大切にし、特に幼保小の接続期の円滑なプログラムの推進に取り組む。
- 実践を通して、保護者等への発信（保育ドキュメンテーション）について研究する。
- 指導主事や外部講師を招聘しての公開保育及び研究協議。外部講師とのオンラインによる研究会。
（①6/3 年長、②7/9年中、③8/20 オンライン、④9/17 年少）
- 幼小連携研究会に進んで参加し、外部講師を招聘しての公開保育及び研究協議を行う。
- 神奈川県公立幼稚園・こども園協会や民間団体主催のオンライン研修に参加。
- 全職員による安全・適切な保育を共有する KYT 等研修（年 10 回）の実施。

4 研究組織

園 長 倉澤良一（ICT 教育担当）
研究 主任 中村孝枝（年少組担任・道徳教育担当）
年中組担任 山田 雅（児童・生徒指導担当）
年長組担任 櫻井ゆか（英語教育担当） ※（幼小中合同教育研究会担当）

5 保育参観・研究協議の様子

（1）指導主事や外部講師を招聘しての公開保育及び研究協議。外部講師とのオンラインによる研究会

- ①6月3日（火）年長組 ②7月9日（水）年中組 ③8月20日（水）オンライン・全学年
- ④9月17日（水）年少組

保育参観では、園長を含めた全教員で保育の様子を参観し、それぞれの幼児の動きを観察し、その内にある思いについて考察した。それぞれの見取りは協議において確認され、幼児の理解の深まりにつながった。年長では、子どもに、どのような力や姿を育てたいかを明確にし、その実現のためにどのような関わりや環境が必要かを考えながら、日々の保育を積み重ねることの重要性を再確認した。年中では、少人数保育について

スポットをあて、幼児の育ち、友達との関わりの中での成長の変化、保育の中で大切にすることを確認しながら、教師の役割について学びを深めた。年少では、3歳児、満3歳児の育ちと4・5歳児との違いについて確認した。指導案を作成する上で、保育のねらいや教師の願いから保育の展開を考えた時に、幼児理解・幼児の発達の実情をとらえることが大切という重要なことを再確認した。

(2) 園内研修会の様子

年間10回のKYT等研修では、全職員で子どもの安全について再確認した。また、気になる園児の行動に対しての関わり方を皆で共有した。行事での動きについても検討する時間を多く設け、チームひなづるで動けるようにした。

6 実践事例

(1) 5歳児 はと組 「生きていたんだ!」の気付きから始まる命の学び

本活動は、年中から年長にかけて継続した飼育経験を通し、命の尊さや成長の過程を実体験として学ぶことを目的に行った。

年中時、ナミアゲハの幼虫5匹を飼育した。幼虫が毎日レモンの葉を食べながら成長していく様子を観察し、子どもたちは生き物の変化に関心を持って関わっていた。その後、幼虫はサナギとなったが、長期間羽化せず、子どもたちの中には「もう蝶にはならないのかな」と諦めの気持ちも見られるようになった。

しかし、年長へ進級した4月、サナギが次々に羽化しナミアゲハとなった。子どもたちは「生きていたんだ!」と大きな喜びと驚きを持って受け止め、「生きていたこと」「待つことの意味」を実感する姿が見られた。蝶が空へ飛び立つ場面では、静かに見守り、命を大切にしようとする気持ちが育っていることが感じられた。

現在も子どもたちはナミアゲハを見かけるたびに当時の経験を思い出し、命がつながっていることを言葉にしている。本活動を通して、命にはそれぞれ時間があり、目に見えなくても成長が続いていること、そして生き物を思いやる心が育まれたと考える。

考察

本飼育活動は、生き物の成長を「継続して見守る経験」を通して、命の尊さを実感できる実践であったと考える。特に、サナギの期間が長く変化が見えない時間が続いたことで、子どもたちは「命はすぐに結果が見えるものではない」ということを体験的に学んだ。

年中時には羽化を待てず諦めかけた経験があったからこそ、年長進級後に蝶に羽化した際の驚きと喜びは大きく、「生きていたこと」「待つことの意味」を強く心に残す結果となった。この体験は、図鑑や映像では得られない、実体験ならではの学びとなった。

また蝶を放した後もナミアゲハを見かけるたびに当時の経験を語りあう姿から、命を一時的な出来事としてではなく、「つながりのある存在」として捉えていることがうかがえる。これは、生き物の存在を身近に感じ、命を大切に思う気持ちが子どもたちの中に育ってきている姿であり、命について考える貴重な経験になったと考える。

今後も、子どもたちが生き物と関わりながら命とふれ合い、待つこと・信じること・見守ることの大切さを感じられる環境づくりに努めていきたい。

(2) 4歳児 ひばり組 「登り棒への挑戦」

A 児がのぼり棒に興味をもち繰り返し取り組む姿を、ドキュメンテーションにして保育室に掲示し、サークルタイムで紹介した。このことをきっかけに、それまでのぼり棒で遊ぶことのなかった子ども達も興味を示し、やってみようと挑戦する姿が見られるようになった。

なかなか頂上まで登ることができない中、すぐに「できない」と諦めてしまう子もいたが、ある時 B 児がはだしになって登り始めると、他児もまねて裸足になって登るようになった。

また、C 児が椅子を持ってきて踏み台にすると、やはり他児もまねて椅子を用い、少しでも高いところまで登れるようにと試行錯誤する様子が見られた。

そんな子どもたちの登り棒での遊びの様子を、ドキュメンテーションやサークルタイムで再び取り上げると、進んで登り棒に挑戦する姿がますます多くなった。

考察

初めは、A 児だけが取り組んでいた登り棒での遊びが、ドキュメンテーションやサークルタイムで紹介したことをきっかけに、次第に他児の興味を引き出し、やってみようという気持ちにつながった。

挑戦してみても、うまくいかないとすぐに諦めてしまう子どももいたが、一人ひとりが自分なりに取り組む様子や友達と一緒に試行錯誤する過程を、たびたびドキュメンテーションやサークルタイムで取り上げたことによって、子どもが進んで挑戦したり、繰り返し取り組んだりする姿へとつなげることができた。

成果だけではなく、失敗も含め自分なりの頑張りを認めてもらえたことが、より子どもの意欲を掻き立てて、繰り返し挑戦する楽しさを味わわせることができたのではないかと感じる。

さらに、A 児の登り棒での遊びの様子をドキュメンテーションで可視化し、サークルタイムで共有したことによって、新たな遊びに興味をもつだけでなく、友達がしていることにも関心をもつきっかけも与えることができたと感じる。

(3) 3歳児 つばめ組 「ダンゴムシ足がいっぱいあるね」

入園後、園庭で興味をもつ生き物の一つにダンゴムシがいる。身近にいて不思議な生態で興味をもちやすい。飼育箱と虫網を持ってダンゴムシ探しを始めた。「せんせい、ここあけて」プランターを移動してほしと言った。探しているうちに居場所が少しずつ分かり始めていた。しかし、虫網ではうまく捕まえない。それを見ていた年中児が「こうやって採るんだよ」と手で摘まんで採り方を教えてくれた。「怖くない？」と聞く A 児。「怖くないよ」年中児が掌にのせたダンゴムシをそっと触ってみた。「触れた！」嬉しそうな A 児。その後、少しずつ触れるようになって手で捕まえられるようになった。

ダンゴムシの図鑑を子どもの手の届くところに置いておくと、食い入るように見ている。「足がいっぱいある」「ウンチは四角だって」「ワラジムシは丸まらないよ」「うん知ってる。」自分達の捕まえたダンゴムシと見比べて色の違い、ワラジムシとの生態の違いを経験から学んでいた。

ある日、子どもをお腹にいっぱい抱えたワラジムシを見つけたので、黒い色画用紙の上に仰向けに乗せて虫眼鏡を置いた。子ども達は夢中になって見ている。「お母さんがウジャウジャしているよ」「赤ちゃんも足がいっぱいある」「本当だ。いっぱいある」「赤ちゃん白いね」思い思いに感じたことをつぶやいていた。

絵具が使えるように用意し、画用紙の隅にダンゴムシを描いておくと、遊びに来た年中児がダンゴムシを描き出した。それを見ていた年少児も次々と描き出した。伸び伸びと描かれたダンゴムシにはたくさんの足が描かれていた。その後もダンゴムシ採りは続き、飼育しながら小さな命にも気づいて、他の生き物にも興味を示している。

考察

遊びや活動の環境を考えるうえで、子ども一人ひとりが何に心を動かしているかを読み取ることが大切と感じる。子どもの気づき、発見、感動にこれからも寄り添っていきたい。

3歳児の場合、手を貸したくなることや「やってほしい」と依存されることが多いが、遊び方の答えを先に示さず、見守る姿勢や異年齢児の力を借りることもお互いの成長にとって良い環境だと感じた。傍にいた年中児の声掛け、関わりによって、双方にいろいろな感情が芽生えていた。年中児は自分の知識を教えることを通して、思いやりや自信に繋げていた。また、年少児にとっても、優しくしてもらった経験で年上に対して憧れをもち、模倣することによってうまくいくことを経験してそれが自信になり、次の活動の意欲へとつながっている。

毎日繰り返す遊び、特に直接体験の中では気づき、発見、面白さ、驚きがあり、感動がある。そこに一緒に共感できる友達や大人がいることで遊びに広がりが出てくる。今後も子どもの小さな心の動きを共有し、共に遊びを作り出せる環境づくりに努めていきたい。

7 実践の成果と課題

- ・サークルタイムで、子どもとの対話、聴く、伝え合う、振り返るという過程を大切にしてきた。特に、運動会、食育、園外保育などの行事を年長児が中心となって企画、調整していくことで充実感や満足感を味わい、自信がつき、自発的行動へとつながっている。
- ・室内遊びでは、いろいろな教材や素材のものを準備しやすく、主体的に行動できるような環境設定を整えやすいので、子ども達も積み木、ブロック、おままごとなど遊び方が自由で主体的に見立て遊びやごっこ遊びへと発展させていた。子どもが自ら選べる教材がたくさんあることで製作もしやすく想像力や創造性が刺激され遊びが長く深く続いていた。少人数で遊んでいても、遊びと遊びがつながりさらに発展していく場面も見られた。遊びの部屋を作ったことで遊びが継続することにもつながった。
- ・戸外遊びでは、子ども達が点々と散って遊んでいると、盛り上がりには欠け、遊びの継続が難しい点が課題である。主体的行動面においても遊びの継続面においても、さらなる教材研究が必要と感じる。

- ・行事は子どもとともに作ることを大切にしているため、計画、実行までの時間が短い中で、教師同士がある程度見通しを立てスムーズに行事展開ができるようにしていきたい。
- ・「半島まるごと幼稚園」をキャッチフレーズに園外保育や真鶴の自然で育つ生き物や植物と触れ合う直接体験を大事にしてきた。子ども達が夢中になる体験活動を通して好奇心・探求心が育っていると感じる。今後、地域の方達の力も借りて、どのようなことが子ども達にとって大切なのかを考えながら環境を整えていきたい。
- ・自分たちでいろいろな野菜を育て、食べる「食育」活動を大事にしてきた。種まきから収穫、話し合う、食するを通して、食への関心や命の大切さを学び、五感が育まれていると感じる。
- ・今年度からの幼小連携研究会では小学校の先生たちと園児や児童について話し合うことで、互いの教育について理解に進歩が見られた。
- ・KYT 等研修を通して気になる子どもの姿・支援の仕方は共通理解でき、全職員がチームとなって支援することで子ども達にとって園が安心できる環境となっている。しかし、日常の振り返りや教材準備の時間確保が難しく、行事や日々の保育の変化についての話し合いの時間が不十分な点も出てきている。更なる工夫が必要と感じている。
- ・昨年度より満3歳児保育を導入したことや2学期からの年中・年長児合同保育により、自然に異年齢児との関わりが増え、年齢を超えて興味のある遊びに関わる姿が見られる。一緒に過ごす中で、トラブルも見られるが、自分たちでどうしたらよいか考え折り合いをつけるという姿も見られるようになってきた。今後も良さを受け入れ合い、認め合う雰囲気づくりを大切にしていきたい。しかし、クラス運営の上では育ちの違いによる保育の難しさを感じる面がある。それぞれの学年、幼児の一人ひとりの発達をより深く理解し、きめ細かい保育に努めていきたい。
- ・今年も園での活動を園だより、タイムラインや写真等の掲示により子どもの様子を視覚的に記録してきた。また、保育ミーティングの中で動画を利用したり話し合いの場を作ることで保護者に園の考え方や保育を理解してもらってきたが、まだ園理解が十分でないので、引き続き、教育方針や園での取り組みに対して理解が深まるような工夫をしていきたい。

8 今後の研究の方向性

- ・研究のサブテーマを少し焦点化したものにし、園や各クラスの課題を一つずつ改善できるように研究を進めていきたい。室内遊びの環境構成の工夫は継続しつつ、戸外遊びの充実に向けて「安全性」と「挑戦」「自然とのふれあい」「五感を育てる」「友達や大人との関わり」「時間・空間」「教材研究」など、多岐の視点から研究を進め、遊びが充実していくようにしたい。
- ・小学校との架け橋プログラムに向けて、さらに、保育園や小学校との共通理解を深めていきたい。
- ・研究会で学んだことをしっかりと積み重ね、教材研究をする時間を生み出し、子ども達とともに、よりよい環境を作り出していきたい。
- ・チームひなづるで定期的に研修し、安全への意識を高め、主体的な保育に努めているが、十分なレベルではない。さらに研修内容や方法の工夫をしたい。